

23. 急性期脳梗塞におけるレストレスレッグス症候群とその亜型の検討

内科学（神経）

椎名智彦，鈴木圭輔，岡村 穂，平田幸一

【目的】RLSを引き起こす脳病変として大脳皮質・脳幹・基底核の脳血管障害が報告されている。RLSの病態を明らかにする目的でRLS/RLS亜型と急性期脳梗塞の関連を調査するために横断研究を行った。

【方法】2016年4月から2018年3月まで当院で入院加療を行った急性期脳梗塞患者104例を対象とした。意識障害や失語，認知機能障害のある患者は除外した。RLSの診断には国際RLS研究グループの診断基準の必須4項目を質問紙により調査し，1項目以上が陽性の場合には面接で4項目全てを満たした場合RLSと診断した。またRLSの診断基準を下肢以外の身体部位に当てはめて満たす場合RLS亜型と診断した。ピッツバーグ睡眠質問票（PSQI），エプワース睡眠尺度（ESS），ベック抑うつ尺度II（BDI-II）や臨床因子（脳梗塞部位，血管危険因子，血液検査結果など）をRLS/RLS亜型の有無別に分類し2群間でMann-WhitneyのU検定または χ^2 二乗検定やFisher直接法を用いて比較検討した。

【結果】急性期脳梗塞患者104例中8例（7.7%）にRLSまたはRLS亜型を認めた。5例（4.8%）に脳梗塞発症前からRLS（4例）またはRLS亜型（下背部1例）あり（pre-stroke RLS/RLS variant），3例が脳梗塞発症後にRLS（2例）またはRLS亜型（両肩1例）を認めた（post-stroke RLS/RLS variant）。RLS/RLS亜型有無別の比較では日中の眠気や睡眠の質，脳卒中の分類，既往，採血データでは有意差は認められなかったが入眠困難のスコアがRLS/RLS亜型群において高い傾向がみられた（ $p=0.058$ ）。本検討でRLS/RLS亜型と関連のあった脳梗塞部位は延髄（25%），橋（15.4%），放線冠（14.8%），基底核（3.8%），皮質（3.8%）の順であった。

【考察】本検討では急性期脳梗塞患者の7.7%にRLSやRLS亜型を認めた。Post-stroke RLS/RLS variantは2.9%であり，急性期脳血管障害後のRLSを検討した過去の報告（10-12%）よりも低い結果であった。RLS/RLS亜型群ではRLS症状のない群よりも入眠困難が強い傾向がみられており，RLSの早期診断と治療が脳梗塞患者のQOLを向上させる可能性があると考えられる。

【結論】RLS症状は脳梗塞後に増悪する可能性があり，RLSの早期診断・治療が患者のQOL向上に重要である。

24. 脳ドック受診者における睡眠時呼吸障害と無症候性脳血管障害との関連についての検討

¹⁾ 埼玉医療センター 神経内科，

²⁾ 埼玉医療センター附属越谷クリニック

赤岩靖久¹⁾，沼畑恭子¹⁾，乗峯苑子¹⁾，吉澤健太¹⁾，横田隆子¹⁾，小川知宏¹⁾，尾上祐行¹⁾，瀧口義晃^{1,2)}，宮本智之¹⁾

【目的】閉塞性睡眠時無呼吸症候群をはじめとした睡眠呼吸障害（SDB：Sleep Disordered Breathing）は，重篤な心血管疾患を発症しやすく，脳梗塞の独立した危険因子であることが知られている。また，近年，無症候性脳血管障害の進展に寄与することも報告されており，注目を集めている。当施設の脳ドック受診者における，SDBの有無およびその程度と，大脳白質病変や頸動脈病変などの無症候性脳血管障害との関連について検討した。

【方法】2016年4月から2017年12月に脳ドックを受診した792名のうち，頭部MRI・MRA，頸部血管超音波および睡眠時無呼吸簡易検査を行った560名（男性358名，平均57.3歳）を対象にした。呼吸障害指数（RDI）を算出し，5未満の正常群と5以上のSDB群で比較した。SDB群を，5～15（軽症），15～30（中等症），30以上（重症）に分けて検討した。

【結果】正常群145名（男性56，51.7歳），SDB群は415名（男性302，59.4歳）であった。SDB群は正常群に比べ，BMI（24.3，21.9），収縮期/拡張期血圧（129.4/81.2，119.8/73.3 mmHg），plaque score（3.64，2.14），白質病変の有無（23.2，8.4%）などが有意に（ $p<0.001$ ）上昇していた。また，正常群・SDB軽症・中等症・重症群において，脈波伝導速度，無症候性脳梗塞の有無，深部白質病変の程度は，SDBの重症度に伴い有意に上昇していた。

【考察】本研究において，SDB群は脳ドック受診者の74.1%に認められた。SDBの重症群では，頸動脈プラークや白質病変などの無症候性脳血管障害と相関が認められた。脳ドックにおいて，SDBの評価をすることは，大脳白質病変あるいは動脈硬化病変を早期に発見するうえで重要であると考えられた。